

弥勒と阿逸多

桜部建

以下の小稿は、赤沼教授の印度佛教固有名词辞典にその初期の資料が示され、望月教授の佛教大辞典にその跡がくわしく辿られた弥勒説話の展開を、E・ラモート教授が、

その大著「インド仏教史」の中 (pp. 775-788) に、明らかに右の両辞典に多くの資料を負いながら、整理・論述したところ、香川教授が最近さらにくわしく論じたところ (印佛研二四、佛敎大学研究紀要四四・四五) に、ほとんど何物をも加えたものではない。ただ、阿含經典より大乘文学が展開したその筋道に、深い関心をもつ一人として、この興味深い説話の、生長発展する過程にいつその注意を払いながら、先学の解明された跡を追って、段階的に整理して見ようと試みたのである。

ティッサ・メッテイヤなる二青年が婆羅門パーブリーの弟子として登場する。

パーブリーはもとヘコーサラ族の美しい都、すなわち舍衛城、にいた (註釈によれば、その国のパセーナディ王の輔師であった) が、そこからヘ南の国 (ダッキナーパタ) へ、すなわちデカン地方、に移って来た修行者で、ヘゴードグリー河畔、アッサカー国とアラカ国と (註釈によれば、いずれもアンドラ国の一部) の中間の地 (註釈によれば、カピッタ樹——英語で wood apple または elephant apple と呼ばれる果樹——の森) に庵を構えて住んでいた (Sn 976, 977)。年齢は百二十歳に達し、三十二相の中の三相までを具えていたという (Sn 1019)。(大智度論卷四に「婆跋隸婆羅門有三相」といひ、同卷二九に「又如弥勒菩薩白衣時師名跋婆梨、有三相、一眉間白毛相、二舌覆面相、三陰藏相」といふ。しかし、

スッタ・ニパータの第五章パーラーヤナに、アジタと

賢愚経卷二二では(へ身有両相、一髮紺青、二広長舌)とある。)すぐれた婆羅門で、もろもろのマントラ、三ヴェーダ、六支のヴェーダ学などに通じていた(Sn 1019, 1020; Ap p. 342, 357)^②。パーヴリーはある時齋会を設けて多くの修行者に金品を供養したが、会の果てたのちになって、一人の婆羅門が来て彼に五百金の喜捨を乞うた。既に与える物のないパーヴリーがそれを断わると、婆羅門はおそろしい呪いの言葉を残して去った。怖れ憂うるパーヴリーの前に一天子が現われて、シャカムニ佛の許へ行って教を乞えと勧めた。そこでパーヴリーは弟子の十六人の青年を佛の許へ遣って教を聴かしめる。長途の旅の果てにマガダ国王舎城のパーサーナカ廟に至り佛に謁した十六人は佛に問いを発する。佛の答えに喜悅した彼らはいずれも佛の許にあって梵行を修することになる。十六人の中の最年長者(CNid p. 268)ピンギヤ独りがパーヴリーの許に還って師にその旨を報じた。(註釈によれば、それを聞いてパーヴリーは不還果を獲たという。)

以上がスッタ・ニパータ第五章の大筋であるがその物語の中で、アジタとティッサ・メッテイヤとは特に重要な役を演じているわけではない。佛の許に至った十六人の中でまず問いを発するのはアジタであり次いでティ

ッサ・メッテイヤであるけれども、そして十六人を列挙する時にはアジタとティッサ・メッテイヤとが常に筆頭に置かれているけれども、この二人が十六人の中で他とかわ立って特にすぐれているわけでもないし、師パーヴリーと特に密接な関係をもっているわけでもない。この物語の中で、彼らはただ十六人の弟子の中の二人ということとどまる。

ところで、パーリの註釈文献によると、アジタは舎衛城の婆羅門の子で、父はコーサラ王の大臣であった。出家してパーヴリーの教を受け、同じゴダヴリー河畔のカピッタ樹の森に住した(Thga p. 73)¹。といい、彼はまたパーヴリーの甥であった(Ap I 337, A.A. I 335)²ともいう。ここではすでにアジタは他の弟子と異って師パーヴリーと親縁関係があったとされているのである。また、ティッサ・メッテイヤの素姓についてパーリ文献が明らかにするところは少い(スッタ・ニパータの註によると、このティッサ・メッテイヤは名をティッサ姓をメッテイヤという一人の人物であるが、別にティッサとメッテイヤとなる別々な二人があるという。そのティッサは舎衛城の人で、メッテイヤとは親友であった。共に出家したがティッサは中途で退転し還俗した。のち、佛がティッサの村を通った時、メッテイヤはティッサを佛の許に連れて来た。その時佛の説いたのがス

タ・ニパータ第四章第七経であるという。しかしこの経の内容はただメッテイヤの問いに対して佛が性交の避くべきことを説くものにはすぎないし、それに相当する漢訳義足経第七経に附せられた因縁譚にもティッサについては全く言及されていない)が大乗の文献を搜ると、觀弥勒菩薩上生兜率天経に(弥勒 Maitreya 先於波羅捺 Varanasi 国劫波利 Kapali (?) 村波婆利 Bavari 大婆羅門家生)とあり、梵文華嚴經入法界品では、弥勒菩薩は善財に答えて(わたしは:…南の国 Dakṣiṇapatha の産 マーラタ Malata 地方 (六十華嚴では(摩離國)、八十・四十華嚴では(摩羅提國)のクータ村 Kūṭāgramaka (六十華嚴に(樓觀)というは Kūṭigara か。八十・四十華嚴に(房舍)というは Kūṭi, Kūṭika などの語形であったか? 六十華嚴で(拘提聚落)八十華嚴で(拘吒聚落)という文字も用いている)に……生れた)という。いずれも、菩薩弥勒の出生を説くに当って、中天竺から南天竺に移り住んだ婆羅門パーヴリーと弥勒(マイトレーヤ、メッテイヤ)との親縁関係が強く記憶されていることを示している。

註① 赤沼・立花・マララセーケラらの学者は Bavari とし、中村・水野博士は Bāvarin とする。テキストに實際あらわれぬ形は主格の Bavari と対格の Bāvarin 属格の Bāvāriṣa であるから Bavari にも Bāvarin にもとれる。異本にあ

つては主格 Bavari もあらわれるからラモート師のように Bāvarin と見ることも可能である。

② なお、赤沼辞典も、それを踏襲してラモート師の佛敎史も、阿羅漢具徳経に(復有聲聞具大捨行、婆那梨苾芻)とある婆那梨をもパーヴリーと見做そうとするが、パーヴリーが比丘になったとは何処にも見えず、そう見るのは無理であろう。

二

さて、未来佛弥勒についての記述は、もちろんあまり数は多くないが、すでに阿舎に見られる。この場合の弥勒、メッテイヤ、はもとよりパーラーヤナに登場するティッサ・メッテイヤとは全く別であり、何の関係もなく語られるのである。

長部第二六経(長阿舎第六経)によれば、未来、人寿八万歳の時、メッテイヤと名づける佛が世に現われ、今の世においてシヤカムニ佛が出世し独り証悟し法を説き比丘衆に困遶されているように、かの佛も同じく独り証悟し法を説き比丘衆に困遶されるであろう。その時パーラーナシーはケートゥマティーと呼ばれるであろうが、そこにサンカ、懷伽、と名づける王が出て、転輪聖王として正法をもって四天下を統治するが、やがてその王宮

を譲り（長阿含第六經では、大宝幢を壞してそれをもって）人
人に布施をなした後、メッテイヤ如来の下で出家し、つ
いに証悟を得るであろう、という。パーリ文献に見える
未来佛メッテイヤについての纏った記録はこれ一つであ
ろう。他はいずれも断片的な記述である。ブッダ・ヴン
サ六五頁、ミリンダパンハ二二四頁、ヴィスッディマッ
ガ四七頁、七一三頁、などはただメッテイヤ佛の名を挙
げるのみ。ヴィスッディマッガ四三四頁（アッタサーリニ
一四一五頁）には、弥勒佛出世の時の父の名をスブラフマ
ー、母の名をブラフマヴティとしている。マハーヴンサ
四三六頁には、この世に降誕する前の菩薩弥勒が兜率天
に在ること、この世で弥勒の父母となるのはドゥッタガ
ーマニー王の父母であって、王とその弟サッターティッ
サは弥勒の最初の弟子となること、などを記す。

漢訳増一阿含卷四四、十不善品第四八の第三經（大正
大藏經第四五三弥勒下生經とはほとんど同文。第四五四・四五
五の二つの弥勒下生成佛經、第四五六弥勒成佛經、第四五七
弥勒來時經などとはほぼパラレル）に至ると、長部・長阿含
に見える物語の内容に新しい要素が加わり大きな発展を
示している。

すなわち、阿難の請いに対して佛は説く。未来、人寿

八万四千歳の時、雞頭 Ketumatī 城に現われた転輪聖王
蟻佉 Sankha の大臣は修梵摩 Subrahma といい、その
妻は梵摩越 Brahnavatī という。弥勒菩薩は兜率天か
ら降下して、梵摩越の胎に宿り、その右脇からこの世に
誕生する。經には、その相容を（有三十二相八十種好、
莊嚴其身、身黄金色）という。修梵摩はその子を弥勒と
命名する。弥勒はやがて出家の志を起し（大正第四五四、
五五、五六經では餉法王の金幢がわずかの間に毀斫されること
によって弥勒が世の無常を感じることをその機縁とする）、
龍華樹の下にて成道する。魔王（第四五六經では（四天王）、
第四五四經では（諸天龍神）はこれを知って人人に、弥勒に
就いて速かに出家すべきを勧める。雞頭の長者善財は八
万四千の徒と共に弥勒佛の許に至って出家しみな阿羅漢
果を得る。蟻佉王は財宝を人人に布施して八万四千の臣
と共に弥勒佛の許に赴いて出家し、みな阿羅漢果を得る
（が、修梵摩ひとり応果に達せず須陀洹を獲るのみである）。梵
摩越も四万八千の侍女らと共に出家し、みな阿羅漢果を
得る（のに、彼女ひとり得られず、須陀洹に留まる^①）。さて、大迦
葉はシャカムニ佛の意を承け、佛の滅後も般涅槃しない
で弥勒世尊の出世を待ちつつ、マガダ国の毘提村の山中
（第四五四經では耆闍崛山中の狼跡山）に在るが、弥勒佛は

その山中に到って迦葉に会い、衆に対つて迦葉を讃える。

そして迦葉の衣を取つて自らそれを身に着ける。すると迦葉の身はたちどころに消散する（第四五六經では、迦葉が神通を示した後へ身上出火入涅槃する）。こうして最後に、弥勒佛に三会があること、その三会に会する有情はずべてシャカムニ佛の下に在つて法に遭つたものであることが説かれてこの興味深い弥勒説話は了る。（根本説一切有部毘奈耶藥事卷六にもこの説話は見出され、ここでは、餉佉王が弥勒佛の下に出家した機縁が、王の七宝の消失したことにあること、中天竺に宝光如来出世の時、北天竺に多財王あり、中天竺に摩娑婆王あり、ガンジス河を挟んで戦おうとしたが、多財王は中天竺に宝光佛在りと知り和議を容れ両者和する時、佛、摩娑婆の輻輪王餉佉なるべきこと、多財の弥勒佛たるべきことを授記し、《佛与輪王二宝同时出現》を予言したことによつて、未来人寿八万歳の時このことあるということ、などさらに幾分新しい要素が加わっている。）

この増一阿含經および弥勒下生經類に見える弥勒説話の新たな進展にあらわれた特徴的な性格は、シャカムニ佛と弥勒佛との間の法の脈絡の強調であり、その脈絡を身をもつて示すのが正法の結集者であり伝持者である佛弟子大迦葉なのである。大迦葉が如来の衣を伝えること、彼が山中に入つて弥勒佛の出世を待つこと、については

種々な伝承がそれを物語っている。

註① 弥勒の両親だけは阿羅漢果に至らなかつたという記述は、増一阿含（およびそれと同文の第四五三弥勒下生經）にのみ見られるところである。

三

相應部第一六迦葉相應第一一經には、迦葉が在家の時、用いていた衣を裁断して僧伽梨衣として出家したこと、出家ののち、ある時、世尊を迎えてその僧伽梨衣を四つに畳んでその上に世尊を招じたこと、世尊がその衣の柔軟なことを嘆じたこと、迦葉が僧伽梨衣を世尊に献じ、世尊の着用していた粗布の糞雜衣を受けたこと、それによつて迦葉がまさしく世尊の嗣子・法の相続者であるとの自覚をもつたこと、が説かれている。このパーリ經典に相当する漢訳、雜阿含卷四一第二四經、によれば、迦葉の出家以前に着用していた衣は《百千金貴価之衣》であった。出家して、彼はそれを《分段割截為僧伽梨衣》とした、という。また、別訳雜阿含卷六第一三經では、迦葉の家は富んでいて、その出家の時には家にある最下等の衣を着けて出たが、それすら《其価猶直十萬兩金》であり、迦葉は惜しげもなくそれを載つて僧伽梨衣とし

た、という。大智度論卷二二にも同様にいう。迦葉が世尊より衣を受けて、自ら法の相続者であるとの自覚もったことが、迦葉をして第一結集の首唱者たらしめた所以である、との理解は、マハーブンスⅢ4に見られる。

迦葉が釈迦牟尼佛の滅後も世に留まって弥勒佛の出世を待つことは、増一阿含卷三五、莫畏品第四一の第五經に佛が迦葉を讚えて、過去の諸佛の頭陀行比丘は「法存則存、法没則没」であるが、わが迦葉は「留住在世、弥勒佛出世然後取滅度」である、と説くところなどに、既に見られるが、その迦葉が、弥勒佛を待つ間、王舎城外の山中に身を隠す物語は、阿含に続く種種の經論に、さまざまに伝えられている。大毘婆沙論卷一三五によれば、王舎城の雞足山^①には三峰があった。大迦葉波はこの山に登り、「慈氏如来の出世までわが身と鉢と杖とを久住して壊せざらしめん」と發願して、般涅槃する。三峰は合して一となって迦葉の身を覆う。やがて弥勒佛出世して、衆と共にここに来り、右手をもって雞足山の頂を撫でると峰はまた三分して、迦葉が鉢と杖を持って中より出でて空中に上る。衆みな嘆じてその心が「調柔」される、という。もっとも、迦葉は未来世まで涅槃に入らず「慈氏佛時、方取滅度」とする見解も同じ婆沙論に見

えている。佛本行集經卷四七によれば、摩訶迦葉は命終らんとして、山中に入り「願我此身、勿令散壞、乃至弥勒如来……出見我身也」と發願し、命終して無余涅槃に入った。「彼涅槃後、二山還合」。未来に、弥勒如来が出世して、衆と共に「至彼処已、時彼兩山、即便兩開……見大迦葉比丘舍利不散不壞、唯著僧伽梨」。これによって衆みな清淨法眼を得る、という。大智度論卷三では、長老摩訶迦葉は耆闍崛山上で衆に無常を説き、佛より得た僧伽梨を着けて衣鉢を持ち杖をとり虚空に上って神變を示し、「直入山頭石中、如入軟泥」。そこで山は還た合した。未来に、弥勒佛は此処に至って、足指をもって耆闍崛山を「扣開」する。迦葉の「骨身」が僧伽梨を著けて出で弥勒の足を拝し、空中に上って前のように神變を示し、空中で身を滅して般涅槃する。衆みなこれを見、弥勒佛の説法を聴いて「大厭心」を起す、という。阿育王經卷七によれば、迦葉は雞足山にて糞雜僧伽梨をもって身を覆い涅槃に入る。三山合して迦葉の身を掩う。阿闍世王が聞いて驚いて山に行くところから開いて迦葉を見るを得た。王は迦葉を礼したのち、薪を求めて「闍維」に附しようとする、阿難がこれを止めて、迦葉の身は神力の持するところであること、未来に弥勒佛が出

世し此処に来て迦葉の身をあらわし諸弟子はそれによつて阿羅漢果を証するであろうこと、を説く。阿闍世王が城に還ると三山は還たび合して迦葉の身を覆った。王はこの山上に塔を建てて供養した、という。

註① Kurkutapāda, Kukkutapāda, Kurkutakapāda などの語形が見られる。パーリ語形は Kukkutapāda である。Gurupādaka の異名があり、先にあげた有部毘奈耶藥事には〈尊足山〉とある。やはり上掲の弥勒来成佛経に〈狼跡山〉とあるは kukkurapāda あるいは kurkurapāda とでもあったか。

四

中阿含第六六説本経はパーリ藏経中に相当經典が無い(その中に含まれる十の偈だけはテーラ・ガーターに相應偈が見出される)が、異訳單経古来世時経があり、大智度論卷一にも引かれ、俱舍論卷三〇にも引かれている。ことに智度論では、〈佛於三藏中、広引種種諸喩、為声聞説法、不説菩薩道、唯中阿含本末経中、佛記弥勒菩薩、汝当来世当作佛、号字弥勒〉^①といて、その弥勒菩薩への関説が大乗佛教の立場から特に注目されている。

この經典では、先のパーラーヤナの中で、パーヴリーの下で相弟子であったアジタと弥勒とが、今シャカムニ

佛の下でまた相弟子であり、さらに未来の世においても一人は転輪聖王シャンカとして、一人は正等覚者弥勒として相連れて出現することが説かれる。その点でこの経は、先のパーラーヤナの説話と未来佛弥勒の説話とを結びつける最初のもつと見做すことができる。すなわち、世尊が比丘らに對つて説く。〈未來久遠、当有人民寿八万歳、……有王名螺(一本「珂」、いずれも明らかに Sāṅgha の訳)、為転輪王、聡明智慧……有四種軍……成就七宝……彼……剃除鬚髮、著袈裟衣、至信捨家、無家学道……於現法中、自知自覚自作証……〉。時に、尊者阿夷哆は衆中に在つたが、佛に向つて言う、〈世尊、我於未來世……可得作王、号名曰螺……至信捨家、無家学道……於現法中、自知自覚自作証……〉。これに對して、佛はいったん阿夷哆を呵して〈汝愚癡人、応更一死、而求再終……〉^②というが、結局、〈阿夷哆、汝於未來久遠人寿八万歳時、当作王、号名曰螺……〉と授記する。そして次に、〈未來久遠人寿八万歳時、当有佛、名弥勒……〉と弥勒佛の出世を予言する。その時、尊者弥勒はやはり衆中に在つたが、佛を礼して、〈世尊、我於未來世久遠人寿八万歳時、可得成佛、名弥勒……〉。佛はこれに答えて〈弥勒、汝於未來……当作佛……〉と授記

する。次いで、阿難を顧みて、〈阿難、汝取金縷織成衣来、我今欲与弥勒比丘〉といい、阿難の持ち来った金糸の衣を弥勒に与えて、〈弥勒、汝従如来取此金縷織成之衣、施佛法衆……〉と訓える。そこで弥勒は佛・法・僧にそれを施す。最後に、魔波旬があらわれて、偈を説いて佛にいう、〈彼（すなわち弥勒比丘）必定当得、容貌妙第一、華鬘瓔珞身、明珠佩其臂、若在雞頭城、螺王境界中〉。佛はこれに応えて、〈彼必定当得、無伏無疑惑、断生老病死、無漏所作訖、若行梵行者、弥勒境界中〉、と。さらに二偈、つつの往復があつて魔は退散する。この最後の挿話においては、魔は弥勒比丘が世間にあつて転輪王たらんことを慫慂して佛道をへ嬢乱ししようとするのであり、世尊はそれを退けて弥勒の出世間者として正等覺者たらんことを期するのである。

ここに新らしく登場する、弥勒が金衣を受けるといふ話も、経律の上に広く見られるところである。まず、マツジマ・ニカーヤ第一四二ダッキナー・パンガ経、それに相当する中阿含第一八〇瞿曇弥経、別訳单経分別布施経では、ただ、マハーパジャパティ・ゴータミーが自ら織ったへ一揃いの新しい衣（瞿曇弥経だけがへ新金縷黄色衣とする）をシャカムニ佛に捧げたところ、佛は受けず、

それを比丘僧伽に施すように訓えた、という出来事を述べ、その後、マハーパジャパティの捧げた衣を受けるようにと取り做した阿難に対して佛が布施の意義やその種類を説くことで終っている。五分律卷二九に見えるところでは、摩訶波闍波提瞿曇弥は佛に二つの新衣を捧げ、一を佛が受け一を僧伽に施したことになっている。また、ミリンダパンハにもこのマハーパジャパティが新衣を施す話は知られている。いずれにおいても、しかし、マハーパジャパティが衣を施すことと弥勒なる一比丘とはまだ関わりが無い。

雜宝藏経卷四に見える大愛道施佛金縷織成衣并穿珠師縁という物語に至ると、説話は俄かに発展する。〈金縷織成衣〉を上つて、佛にそれを僧伽に施すようにとさとされた大愛道は、僧中に到つて衣を捧げた。なかなかその衣を取る人が無かつたが、やがて弥勒が来て、それを受けた。弥勒は金色の衣を着けて城中に入って乞食した。〈身有三十二相、紫磨金色〉で衆人競つて弥勒を看るも、食を施す人としては無かつた。ただ一人の〈穿珠師〉があつて弥勒を家に招じ、食を供し説法を聞いた。彼は供養と聴聞に熱心になつたあまり、急ぎの註文であつた珠の加工の約束の期を遅らせて註文を取消されてしまい、十

万金の損失を招いた。穿珠師の妻が願って夫を責める。
《其夫聞已、意中恨恨》。そこで弥勒は穿珠師を精舎に伴い、供養と聞法の功德の万金に代え難いことを諸上座比丘に説かしめる。特に、阿難律は長長と過去世の因縁譚を語って、比丘衆への供養の功德の大なることを説く。
《時、穿珠師聞是語已、心大歡喜、で物語は了る。

この経に、弥勒比丘が《身有三十二相、紫磨金色》であったという記述については、発智論卷一八およびそれに対する註釈、すなわち大毘婆沙論卷一七六一一七八、に菩薩の相異熟業に関して述べるところに注意せしめられる。それによれば、有情が菩提心を発して不退転であっても、ただそれだけでは菩薩と名づけることはできない。その有情は《雖於菩提決定、而趣未決定》であるからである。趣も亦決定されるためには、正覚者として具備すべき相を異熟するための業を《造作》し《增長》しなければならぬ。いま、慈氏菩薩の場合、シャカムニ佛の弟子としてここに出世する以前の過去百大劫において、すでに相異熟業を修めて、《除金色相業、余皆円満》であった。そこで残った金色相業が今、佛によって満たされようとするのである。婆沙論は、上掲の説本経を（経名は挙げないが）長長と此処に引いて、慈氏に金色の衣

が与えられて（婆沙論は、それが大生主喬答弥によって施与されるという説と、世尊の命によって阿難陀がそれを覚めて来て与えるという説と、二種の伝承があることを示している）、慈氏がそれを佛と上首の僧とに奉施することが、慈氏の菩薩として必須の金色相業を満たすことになるのである、と説いている。

註① 俱舍論三〇、五右。そこには経名は出されないが、シャマデーヴの俱舍論註に、その経が《中阿含王相応品第十経（現存の漢訳中阿含経では第九経） Pūrvānantarāntarā-sūtra》であると示している。

② 意味が少しはつきりしない。古来世時経では《当以一生究竟道德而反更求周旋生死》とあり、婆沙論一七八では《云何不欲一死而求再死？》とある。

③ 古来世時経では《無著狐疑斷》とある。

五

賢愚経卷一二波婆離品は、明らかに、先のスッタ・ニパータ第五章パーラーヤナの説話の発展に、未来佛弥勒についての種々な説話の展開を結びつけ、いわば、この説話群の発展の頂点に立つもの、と見られる。

すなわち、《婆羅捺王名波羅摩達、王有輔相、生一男児……号曰弥勒……国王聞之、懷懼言曰、念此小児……

必奪我位……、即勅輔相「聞汝有子、容相有異、汝可將來、吾欲得見」……其兒有舅名波婆梨、在波利弗多羅 Patliputra 國、為彼國師……、於時輔相、憐愛其子、懼被其害、復作密計、遣人乘象、送之与舅、舅見弥勒……加意愛養……其年漸大、教使學問……」。波婆梨は弥勒の美を顯揚するために齋會を設けようとして、一弟子を波羅捺に遣わし父なる輔相に財を乞わしめた。その弟子は途中で、シャカムニ佛の噂を耳にし、行つて佛にまみえようという心を起し、佛の滞在する地へ向つたがその道で虎に噉われて死んだ。佛にまみえようと願つた善心の故に、彼は天に生れた。パーヴリーは私財を投じて大会を設け、へ請婆羅門一切都集、供弁餽饈種種甘美、設ところがへ布施訖竟、財物罄尽、有一婆羅門、名劣度差 Raudraska (?) 最於後至して五百金の喜捨を求め、パーヴリーの謝絶に遭うと、おそろしい呪いの言葉を残して去つた。懼怖するパーヴリーの前に、先の弟子が天より降下して現われ、佛の許に行けと勧める。そこでパーヴリーはへ即勅弥勒等十六人往見瞿曇。彼らは佛所に到つて、へ時弥勒等……深生敬仰……佛為說法、其十六人得法眼淨。……十六人中、時有一人、字賓祈奇、是波婆

梨師子、衆人即遣、往白消息。パーヴリーはビンギヤの報告を聞いて、へ長跪合掌、向王舍城、自說誠言「……世尊大慈、予知人心、唯願屈神、來見接濟……」、於時如來、遙知其意、屈伸臂頃、來到其前……佛為說法、逮阿那含」。

ここまでは、パーラーヤナの説話の少しばかりの姿容と發展であるが、このあと、物語は未來佛弥勒の説話に結びついて行く。すなわち、シャカムニ佛はやがて父淨飯王の請いに応じて迦毘羅衛城に赴く。摩訶波闍波提憍曇弥は手づから紡ぎ織つたへ金色之氈を佛に捧げる。以下、雜寶藏經に見えると同じく、弥勒が金色の衣を受けること、穿珠師が弥勒を招ずること、諸上座が穿珠師のために比丘衆への供養の功德の大なることを説くこと、が説かれ、最後の阿那律の説く過去世の因縁譚が終ると、そこへ世尊が來臨しへ汝等比丘、説過去事、我復次説當來之世」といって、佛の予言がはじまる——。未來人壽八万四千歳の時、勝伽 Sāṅgha と名づける転輪聖王の世にへ当有婆羅門家生一男兒、字曰弥勒、身色紫金三十二相衆好畢滿、光明殊赫であらう。彼はやがて出家學道して正覺を成じへ広為衆生、轉尊法輪するであらう。この弥勒佛の三会の転法輪の間に、おのおの九十余億の

衆生が度せられるであろうが、それらの衆生はみな今の世で我、シャカムニ佛、の法に遭つて福を植えたものである。いま三宝に供養した者もその縁に洩れない、と座にあってこれを聞いた弥勒比丘は「願作彼弥勒世尊」と発願し、〈汝当生彼為弥勒如来〉と佛の授記を得る。ついで比丘阿侍多が「我願作彼轉輪之王」と願うのに対して佛の答えは「汝但長夜貪樂生死、不規出耶？」とあるのみであるから、ここでは阿侍多はただ佛に呵せられただけであつてその願いは佛によつて認められなかつたように見える。そしてこのあと、物語は、この世においてシャカムニ佛の下に比丘たる弥勒が、未來の世に同じ弥勒の名で等正覚者たることについて、人人が不審をいだいたこと、それに対して佛の説明がなされたこと、穿珠師が無上正眞道に意を発したこと、を述べて完結している。

先にも述べたように、わたしには、弥勒説話の發展は

この物語をもつてその頂点に達したと見得る、と思われ。もう一つ、学者によつて注意されている、アジタと弥勒とが同一視される現象——マハーヴスツに既に〈名 nama からすれば Ajita, 姓 gotra からすれば Maitreya〉とあり、法華経や無量寿経などの有力な大乘経典にもその同一視が見られ、後期のパーリ佛典にも「アジタと名づける、名によればメッテイヤという、両足尊 (JPTS 1886, p. 46) などと現われ、シナの註釈書にも「弥勒菩薩、什曰姓也、阿逸多字也(僧肇・注維摩経卷一)」と理解されているような事実——が、果して「混同」によるものかどうか、Maitreya Ajita (不敗者弥勒) の称呼がイランの Mithra Sol Invictus (征服し得ぬ太陽たるミトラ神) の称呼といかなる関係にあるものか、などは今のわたしの判断の及ばぬところである。

註① 「出〔離〕を規とせずや」と解すべきであらう。